

はじめに

無量寿經の異訳の大阿弥陀經には、絹飛蠅動（けんびねんどう）という字があるという。これは、飛びあるく虫けら、うごめくうじむしという意味だそうで、まさかお経にまで虫が出てくるとは……。やはり、人間は昔から虫と深いつきあいがあったわけである。そういえば、弥生時代の銅鐸にもトンボ、カマキリ、クモ（アメンボ）などが絵で出てくる。人生は、今も大変多く昆虫たちとのつながりが深い。こうしたことから筆者は、最近、昆虫が如何に人生と生活に結びついているかをテーマとして昆虫の玩具、工芸品、切手などを収集したり、古来から農作物や生活で害虫になやまされていたための防虫機器なども保存収集している。今回生活上に悩まされる蚊、蠅、ゴキブリの駆除用品や各資料から虫の世界へせまってみたい。ただし、筆者は農学者でも衛生学者でもないのので、ほんのお遊びの感覚で主に生活関連のみにしぼった。

蚊のフォークロア

いまの日本では蚊はうるさい程度の問題とされるが、毎年数十人ばかりが日本脳炎にかかる。世界的にみるとマラリア、フィラリア、テング熱などの媒介者として有名。そのうえ都市化により真冬でもチカイエカが地下に生息している。

人類の敵としてノミ、シラミ、ゴキブリ、ハエなどと比べて格段に大きく、蚊は最も高度な進化をとげている。その蚊の防除については、家庭では電子蚊取りのマット式やリキッドタイプがおおはやりだが、一昔前は蚊帳による遮断で夜寝ていたものである。また蚊から身を守るため殺虫剤を噴霧器で撒き、それもフロングス入りのスプレー式にとってかわってしまった。これら生活と関連した蚊防除の民俗雑学を調べてみた。

蚊帳は播磨が元祖

蚊と蠅がやたらに多かったのか、ひと昔前までは夏の必需品だった蚊帳、夜は必ず蚊帳を吊って寝ていた。昼寝のときすら吊る家があったものである。

網戸の普及などですっかり陰をひそめてしまったのか、最近では蚊帳を買い求めようと思っても、どこへ行けば手に入るのやら見当もつかないほどになってしまった。しかし、病人やお年寄りの中には、蚊取り線香とか、今流行りの電気蚊取り器を嫌うかたがおり、蚊帳愛好者は根強くおられる。その理由は線香は煙り、電気蚊取りは殺虫成分の蒸発などが気にいらぬそうだ。だから今でも、滋賀県とか奈良県では多く作られている。それこそ昔は麻製の濃緑色のものが多かったが、今はナイロン製の薄い水色のものと代ったと聞く。

その蚊帳にちなんだ名を残す神社が播磨にある。その地は、飾磨郡夢前町山之内、天下の三彦の一つ雪彦山の麓にある賀野神社である。

鹿野神社ともいい、祭神は伊邪那岐命（いざなみのみこと）、伊邪那美命（いざなみのみこと）、保倉命（うけもちのみこと）、高皇産靈神（たかみむすびのかみ）、神皇産靈神（かみむすびのかみ）ほかである。

「播磨国風土記」（715年ころ）に「品太（ほむた）の天（すめらみこと）、巡り行でましし時、此処に殿（との）を造り仍りて蚊帳を張りたまひき」つまり「応神天皇が巡幸して来た折に、当地に宮殿を造営し、蚊帳を張った」ということに由来し、賀野神社としてその名をとどめているという。

〔角川地名大辞典による地名の説明〕

【古代】 賀野里 奈良期にみえる里名。播磨国飾磨郡「風土記」に飾磨郡十六里の一つとして「賀野里」とみえ、応神天皇が巡幸し、蚊帳を張ったことに由来。

【中世】 戦国期の文明8年6月、日の日付をもつ「雪彦山三所権現神殿」を僧明阿の本願と勧進活動によって造立している（賀野神社文書）。

【近世】 鹿谷村 明治22年～昭和30年の自治体名。はじめ飾西郡。明治29年からは飾磨郡に所属。新庄、神種、山之内、前之庄の4か村が合併して成立。旧村名を継承した4文字を編成。昭和30年夢前町の一部となる。

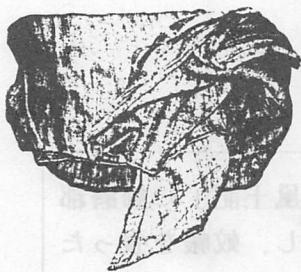
これが日本で蚊帳のことが初めて現われた記述であり、播磨は蚊帳のいわば元祖の地なのである。江戸時代には、初夏のころ市中に蚊帳を売り歩くことを業とした人がおり、美声で「萌黄（もえぎ）のかやあ」と呼びながら歩いたという。

蚊帳のいろいろ

夏の必需品だが、網戸の普及とクーラーの多用で、すっかり陰をひそめてしまった蚊帳。8世紀ころから使われている蚊帳は「日本書紀」にも応神天皇の時に、中国から蚊屋衣縫（かやのきぬぬい）という女性の技術者が渡ってきたと記してある。小泉和子著の「道具が語る生活史」に詳しく記してあるが、伊勢神宮の蚊帳の場合、殿内全体に大きな蚊帳を吊り、さらに寝床のぐるりにも小さな内蚊帳を吊っている。材料はずしとって紗ににたものという。古文書によると、蚊帳の記録が多くなるのは室町時代からで、この頃になると奈良が蚊帳の産地となる。戦国期になると近江の八幡地方の麻蚊帳が進展する。

さて、蚊帳が一般に普及したのは江戸時代からで、当時は竹の竿を井桁に組んで天井から吊るしていた。蚊帳は麻に続いて木綿、また延喜式には神宮の衣の中に白絹の蚊帳が使われている。蚊帳の色は萌黄、浅黄、白無地である。紙漉きが盛んな地方では紙蚊帳が用いられたらしいが、風通しが悪く人気は今一つであったといわれる。

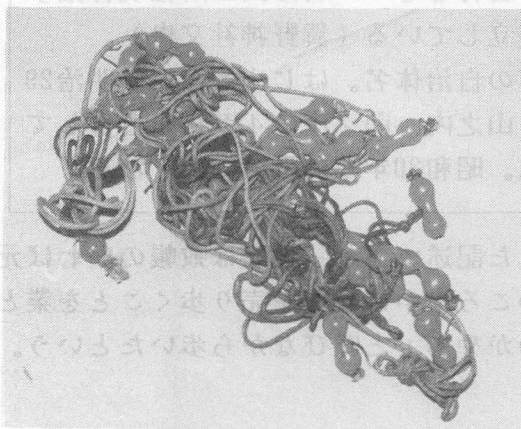
筆者がしってる蚊帳の印象は、長押しに打った釘にひもを結んで四角い空間をつくり蚊が蚊帳の中に入らないように団扇等で叩いて中に入ったものである。あのなつかしい蚊帳を紹介してみよう。



←江戸時代～明治時代
(木綿生地)



明治時代→
(麻生地)



蚊帳を吊るフック
(最近のもの)

蚊遣り火の材料

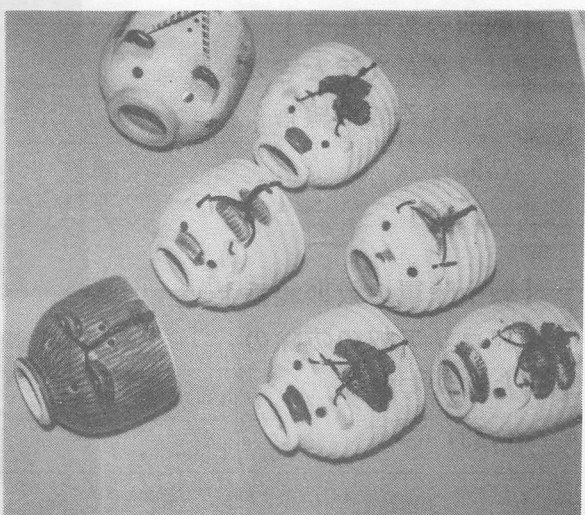
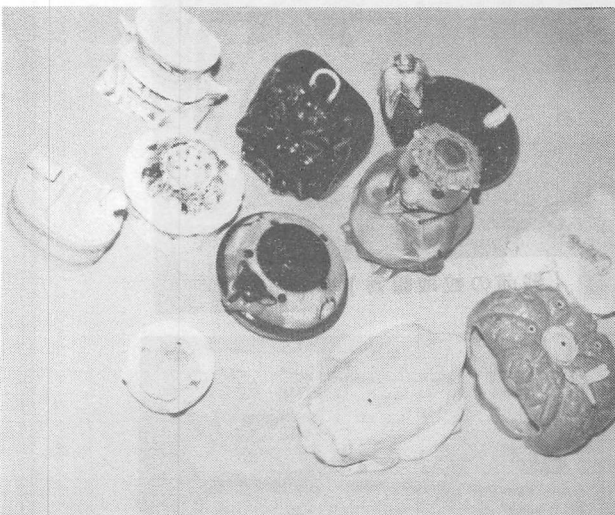
蚊遣りとは今でいう蚊取り線香のことで、昔はいろんなものをくすべて使っていた。蚊取り線香のような殺虫効果は少なく、ただ煙いため蚊を追い出したものと思われる。

蚊遣りの材料

松葉、橘の皮、蜜柑の皮、橙の皮、茶の葉、杉、樅の木、麻、蓬、樟
椿の落花、亀、鰻、川魚の骨、鋸屑

蚊遣り器

蚊取線香を入れるもので「蚊遣り豚」は有名。椎名誠編著の「科学ノ書」によると、天正年間から瓦の産地であった東京都の今戸付近が発祥の地という。現在、インテリアを兼ねた蚊遣り器が各地の陶器売場を賑わせている。



蚊遣りのいろいろ（左）と蚊遣り豚（右）（播磨昆虫民俗資料館）

蚊取線香

蚊取線香の歴史

ア 蚤取り粉をこぼし、くすぶる灰皿に入れたところ気化し、蚊が落ちてきたのがヒントで蚊取線香が考えられたという話はよく知られている。筆者はあの除虫菊を原料としたにおいは嫌いではない。電気蚊取全盛のこの時代でも多くの家庭に渦巻き形の蚊取線香はまず置いてある。

蚊取線香が最初に作られたのは明治23年で、あの有名な金鳥製品。当時は棒状蚊取である。明治28年に渦巻き形の線香が考えられたそうだが、この発案は家庭の主婦だったそうである。いまの蚊取線香のほとんどは緑色だが古いものは、黄土色が多く、形もうどんの玉のように断面が円い。

【金鳥の棒状蚊取線香】

最初に作られたのは

明治23年

(写真1)



【戦前の蚊取線香】 (写真2)

【戦前の蚊取線香】

ハンゲル文字などが
みられる蚊取線香

(写真2)

【戦中陸軍の蚊取線香】

マラリア蚊の防除の
ため使われた

(写真3)

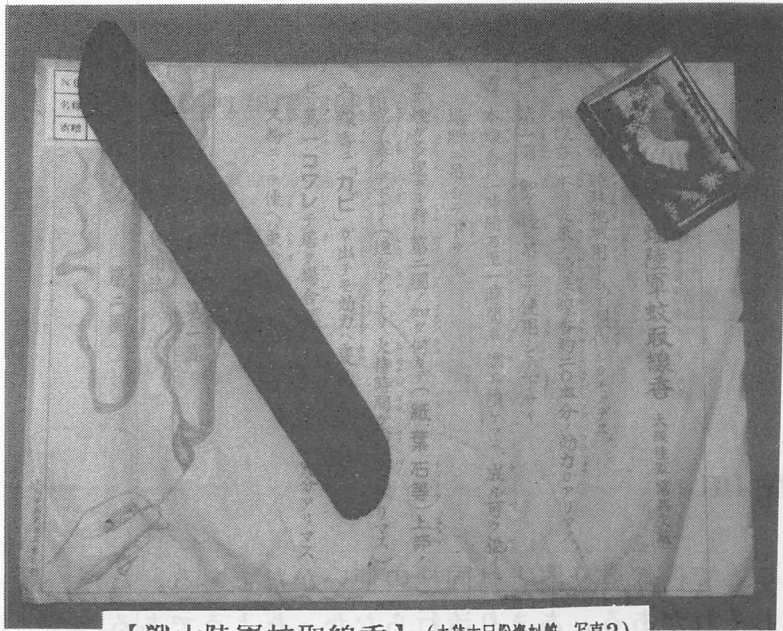


【なつかしい蚊取線香】 (写真4)

【なつかしい蚊取線香】

戦後のなつかしい線
香と最近の線香

(写真4)



【戦中陸軍蚊取線香】(赤穂市民俗資料館 写真3)

昭和十二年五月七日付 広告 大阪朝日新聞第19949号



戦争前後に東南アジアに輸出していた蚊取線香の袋



中国(右下)と台湾の蚊取線香

新時代の蚊取り

夕御に書讀に客來に腰看の病人

獨米英日 許特毒毒

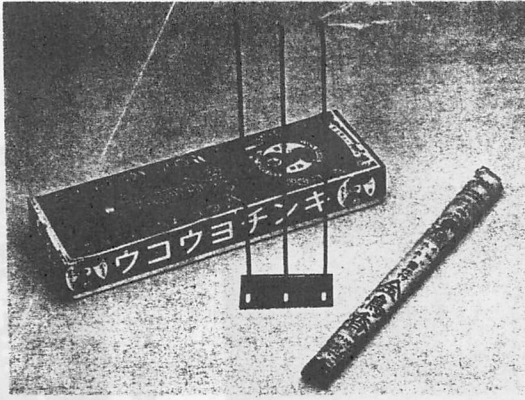
ルートカ

(菊虫除老断) 倍数の香線の他力効

館本寄贈りとか住安 房藥大住安製

店 興 販 販 販
大 丸 十 合 昌 興
庄 品 均 池 物 田
販 販 販 販 販
販 販 販 販 販

昭和十一年八月号 広告 宝塚女青より



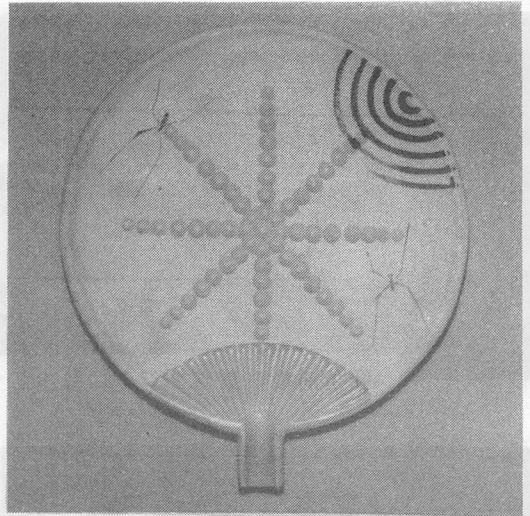
(サライ1993年第16号より・写真1)

蚊取り線香皿

蚊取り線香を置く皿のことで、蚊遣り器とは同様の使いかたである。ただ、風がふいたりすると消えるおそれがある。あまり流行らなかったようである。

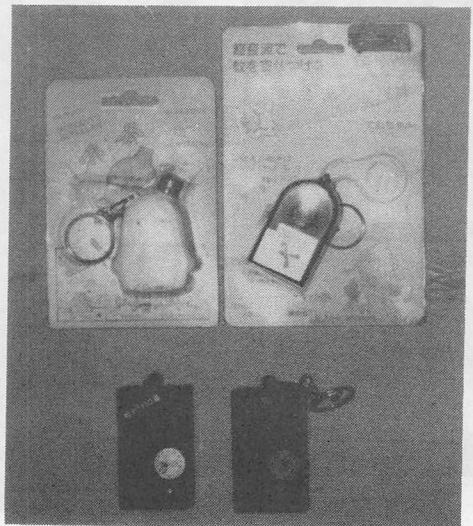
戦前の蚊取り線香皿で、表面にアメンボウが描かれてある。これは火事が発生しないよう水を表現したものであろう。

最近の蚊取り線香皿で金属製のものもあるが、風情もなく部屋のインテリアにもならず実用のみだったのか流行らなかった。



超音波蚊よけ

♀の蚊の嫌う♂蚊が発する音波に似させた音波を人工的に発して吸血する♀蚊を遠ざけるためのもの。



野外使用のむしよけ

夏季、山野や田畑で仕事をするとき、虫が多く、蚊やブトなどから避けるため腰などに下げて使用する。

【むしよけ】……ホリ、ホリ、カッソ、カビ、カバ、ガリ、カコ、ホリなどの名がある。

木綿のボロを縄でくくり、中に藁（わら）の細い「ホク」というものを入れ、外側にヨモギなど各種の干し草を巻きつけ、さらにその上を縄でしばっていた。（写真1）兵庫県昆虫館

空気抜きの穴をあけた竹筒に、木綿のボロだけを入れ、これをくすべて使っていた。しかし、最近では使われることは少なくなってきた。（写真2）上月町民俗資料館

【携帯用蚊取線香皿】

主に野外で作業する時に使用するむしよけで中に蚊取線香を入れて使用する。最近のアウトドアでもよく使用されている。

【キャンプ用むしよけ】

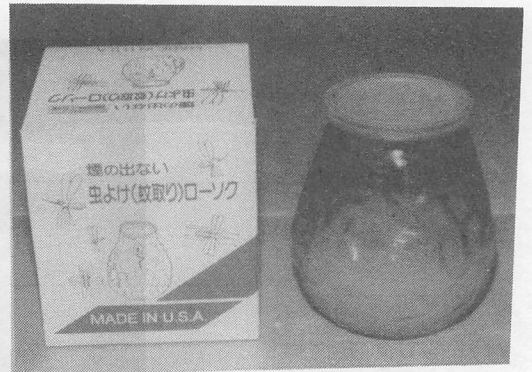
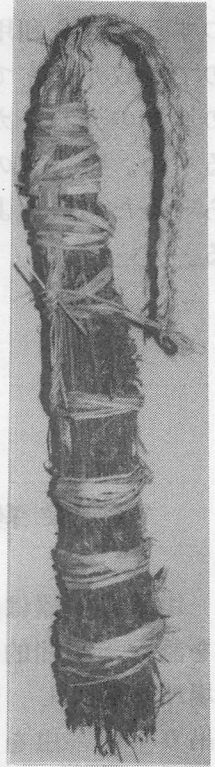
野外で使用するため特別に大きく、また太く作ってある。主に外国から輸入していることが多い。（写真3）

【目すだれ】

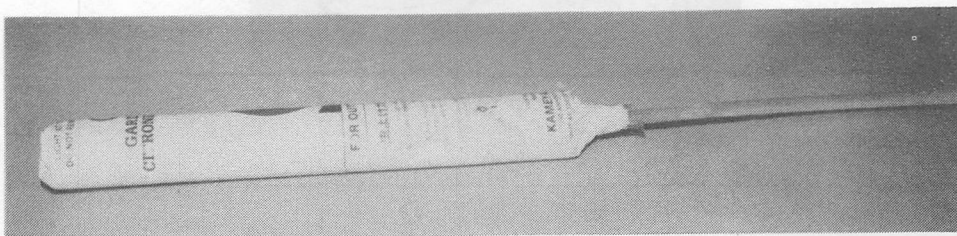
水田の耕作に際してむしから避けるもの。蚊帳と金網がある。



↑
(写真2) (写真1)⇒



(写真3) トーチ形もある！



蚊飛来防止ランプ

ベット用に使われるもので蚊の飛来を防止するため、昆虫類がもつすう光性を利用し設計されたもので、蚊が好んで集まる500nm以下の波長の光りをカットして防止するもの。特に犬のフィラリア病から守るため最近よく利用されている。



電撃殺虫器

電撃殺虫器は薬剤を一切使わず、匂いも煙も出さずに虫の好きな光の波長で虫を誘い、瞬間的にショック死させる人畜無害の殺虫器です。蚊をとる場合は設置場所を低くし、蚊の集まるところに置くと有効。通常、床より2m以上の高さに吊り下げ害虫をショック死させる。



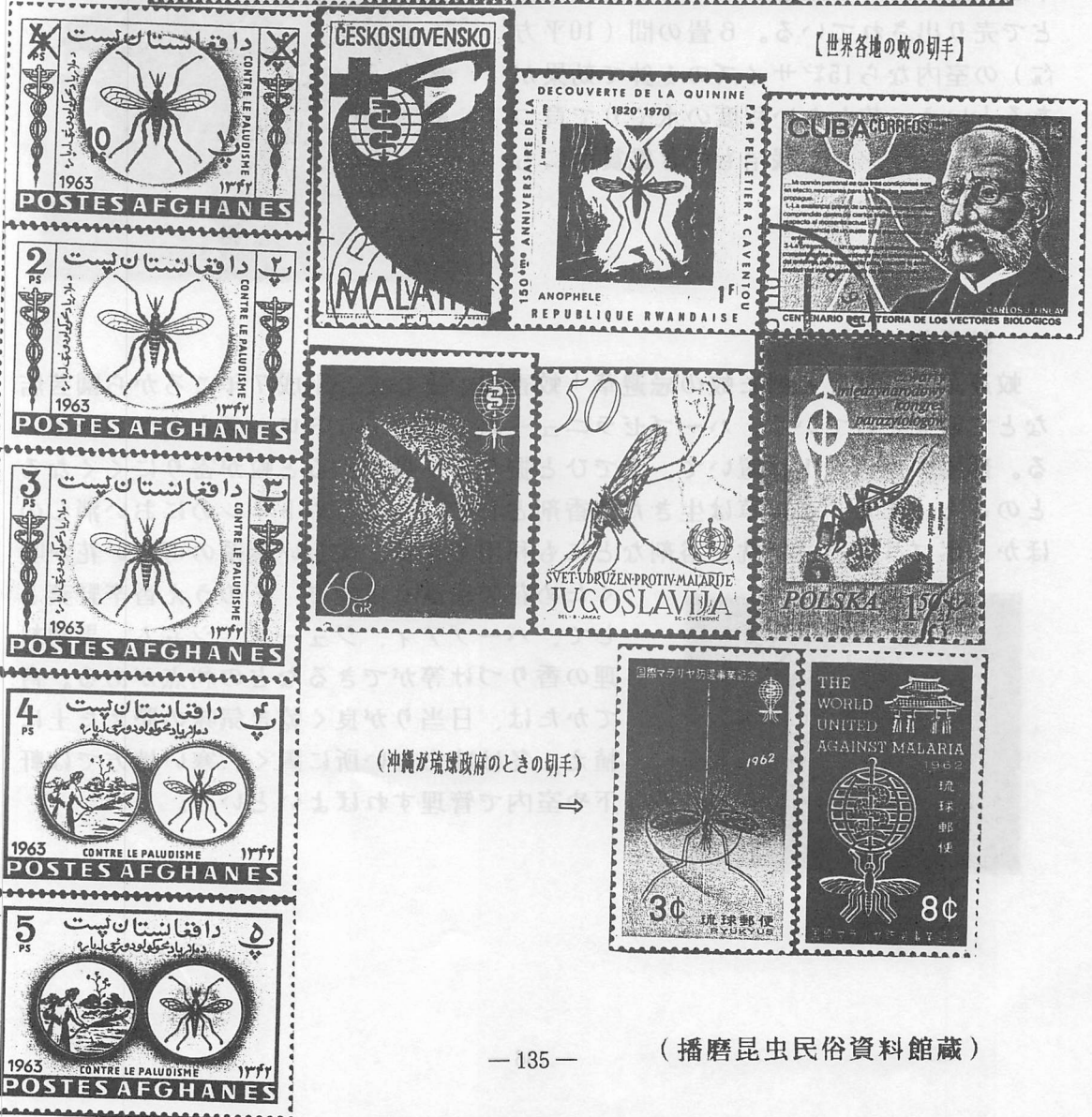
蚊の切手

蚊の切手

日本では蚊の切手は発行されていないが1962年、WHO（世界保健機構）がマラリア撲滅キャンペーンを呼びかけた。それから多彩な切手が発行されだした。



【世界各地の蚊の切手】



(沖縄が琉球政府のときの切手)

(播磨昆虫民俗資料館蔵)

蚊の忌避草

手取の蚊

蚊連草

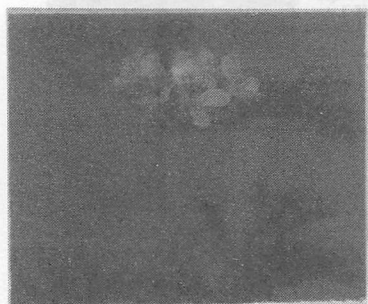
夏場の蚊は実に嫌なものである。蚊取線香や電気蚊取とともに、最近、植物の香りで蚊を追い出すという「蚊連草」という名の室内用の観葉植物が販売されている。この植物の登録名はブラゴニウム・シンロサ・ファンリーニといい、中国のシトロネラ草とアフリカン・ゼラニュームをもとに、オランダの遺伝学者デック・ファンリーニ氏が遺伝子組み換え技術を使って人工的に作り出した植物という。

葉から出る柑橘系の香りが蚊を追い出すことが経験的に知られており、この植物の増殖種を持つオーストラリアのファイトテック社から、日本の伊藤忠アグリシステムが、国内の独占販売権を得たもの。平成5年7月から全国のホームセンターなどで売り出されている。6畳の間（10平方メートル）の室内なら15センチサイズの1鉢で効果があるという。乾かない程度の水やりで育つそうので、プランター栽培もでき鑑賞用にも向くという。



蚊香籠

蚊連草とほぼよく似た蚊の忌避草「蚊香籠」として、平成7年ころから園芸店などで販売されている。ハーブゼラニュームでセンチッドローズと名がついている。部屋の窓辺に1鉢置いて、手でひと振りふた振りすると蚊が寄りにくくなるとのこと。また、この草は生きた芳香剤として、ベットやトイレのにおい消しのほか、ポプリ、ハーブ枕、浴剤などにも利用できる。美しい紫系の可愛い花が咲くため花の鑑賞も可能で、そのうえ香辛野菜として、ハーブティ、ジュース、ジャム、果物料理の香りづけ等ができるなどの利点がある。育てかたは、日当たりが良く乾き気味の肥えた土に植え、冬は凍らない所に置く。寒い地方では軒下や室内で管理すればよいという。



電気蚊取器

雑音の噴虫器

電気蚊取器には2タイプがある。いわゆるマット方式とリキッドタイプ方式である。いつごろ発売したのか定かでないが、電気コードをみると昭和40年代とおもわれる。蚊取線香に較べると煙りが見えないため清潔感があり、人気も高く今では蚊取器の主流をなしている。欠点としては停電に弱い。

【ベープタイプ】コードの長いタイプとコードレスタイプがある。どちらかというとりキッドタイプにおされぎみで、いずれは消えゆく運命になりそうだ。マットの下の発熱板により気化させ殺虫する。

【リキッドタイプ】いまや主流の蚊取器で30日タイプと60日タイプがある。殺虫成分を霧状に気化発生させるタイプ。これもコードタイプとコードレスタイプがある。

ハイテク携帯用蚊取器

市販の蚊とりマットが使え、おまけに軽量コンパクトで、つりさげても使える。電源が不要で、野外などコンセントのない場所でも使用でき、長時間使用しても一定温度を保つ利点がある。使用方法として、セラミックヒーターをライターなどで1～2秒乾燥させて使う。



殺虫剤の看板

器姐她及事

すっかり陰をひそめてしまった珙瑯（ホーロー）の看板。最近、にわかにはアンテックショップで高額に取り引きされている。特に有名人の顔入りの看板は人気が高くなっている。播磨昆虫民俗資料館で収集した看板を紹介しよう。



神戸新聞（平成5年11月14日・姫路西播版）スクラップより

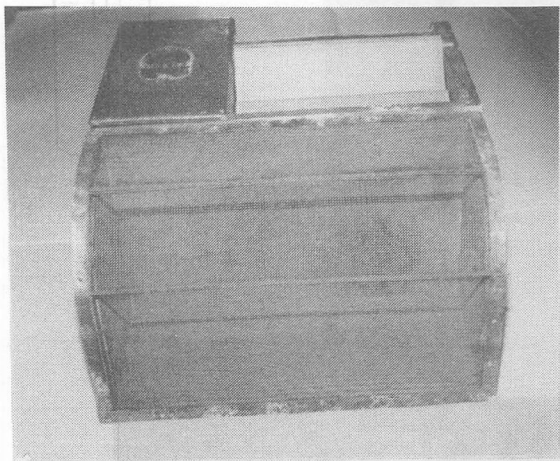


蠅のフォークロア

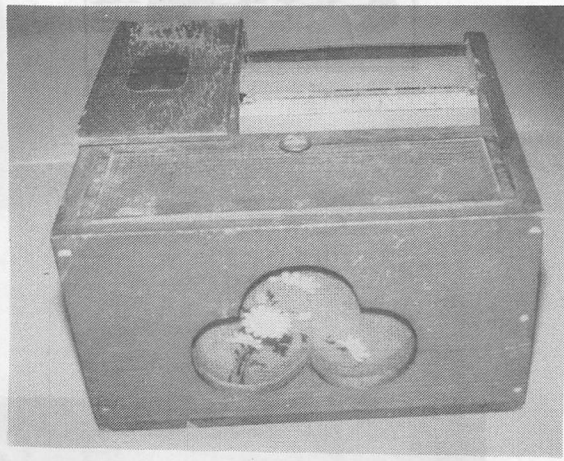
器 器 器

中 蚊と共に蠅もうるさい存在で、昔から蠅の防除も生活必需であった。 蠅の防除
 (S真平) 。ふるまき器蠅取り(1真平)のよきつてし用物ゆ人き(歴史録) 歴史録
 史録) 歴史録に記述がなすところ蠅取りのよきつてし用物ゆ人き(歴史録) 歴史録
 のよきつてし用物ゆ人き(歴史録) 歴史録に記述がなすところ蠅取りのよきつてし用物
 ゆ人き(歴史録) 歴史録に記述がなすところ蠅取りのよきつてし用物ゆ人き(歴史録)
)も **蠅取り器** イヤキスヤおヤ。(歴) トミテおヤ。 たるあや一ミヤマでコー
 。ふるまき器蠅取り(1真平)のよきつてし用物ゆ人き(歴史録) 歴史録

大正時代、尾張時計機という時計メーカーが製作したもので、商品名をハイトリックという。紙を張った回転板がゆっくりと手前側に回転するし、とまった蠅が自然に入る仕掛けである。時計とおなじゼンマイ仕掛けで、回転板にとまった蠅は回転板と箱の間のわずかなすきまを通過し、2度と外に出られないようになっている。回転板には蠅の好む汁などをつけて取るようになっている。



網と本体とが分かれるようになっている

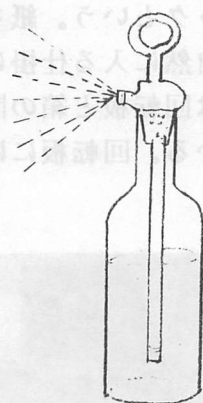
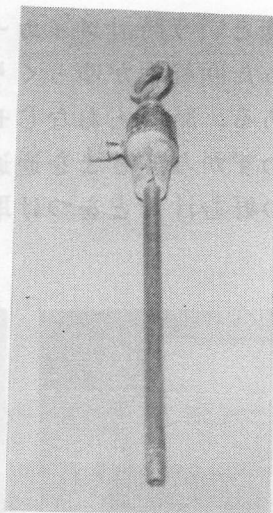


網と本体とは一緒になっている

噴霧器

蚊や蠅を殺虫するには小型の噴霧器が使われていた。昭和初期には空き瓶の中に油剤（殺虫剤）を入れ使用していたもの（写真1）や噴霧器もある。（写真2）

よく使われたのは昭和25,26年から30年過ぎころまでで薬局に油剤（殺虫剤）が売っていた。近年はエアゾールに変わってしまい。フロンガスを撒きちらし問題となった。最近ではノンフロンで燃えないものが増えてきた。殺虫剤メーカーにフマキラーがあるが、フはフライ（蠅）、マはマスキット（蚊）キラーは（殺す）という意味だそうである。



（写真1） その使用例



噴霧器のいろいろ



油剤（アース）のいろいろ

蠅取りリボン

昔からあるが、最近では使われる家庭が少ない。いわゆるガムテープのようなもので、もっとテカテカしている。日本ではカモイ製品が有名。



蠅取り紙
← 日本 台湾 ←

蠅取り紙

これも昔からあるもので、蠅が好んで止まるような仕掛けになっている。一度肢を置いた蠅は、たちまちひっついてしまい捕獲される。蠅取りリボン同様、殺虫剤に対しての抵抗性の心配がなく、またよく使われる時代がくるかもしれない。

ンボリリ

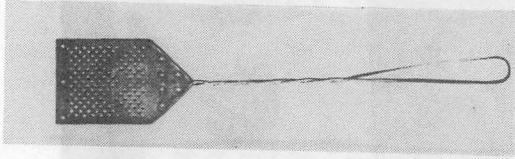
新製品、捕獲タイプセンター
ハイトリリボン
捕獲型の時代は来たり

定価 150円
100円
50円
20円
10円

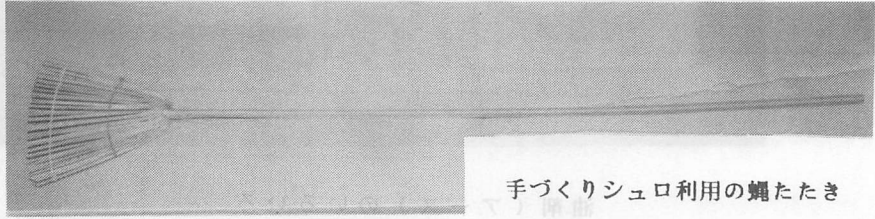
ハイトリリボン特約販売店に限り定価用紙を添えてご注文下さい。

蠅たたき

蠅を叩き殺す方法で、原始的ではあるが今も販売されている。播磨地方では結構手作りの蠅叩きがシュロの葉で製作されている。



昭和20-30年代に使われたベークライト製
蠅たたき



手づくりシュロ利用の蠅たたき

蠅追いファン

昭和20～30年代には結構、魚屋、八百屋などで使用されていた。台湾では基隆地方で現役に使用されている。3年ほど前にテレビ番組「探偵ナイトスクープ」で蠅追いファンを作成していた。



網製蠅取……下部にある鍋に蠅の好物をいれる

網製蠅取

筆者は日本での使用や製品を見たことがないが、昔の文献にでていたので紹介しておく。また中国では現役に利用されている。

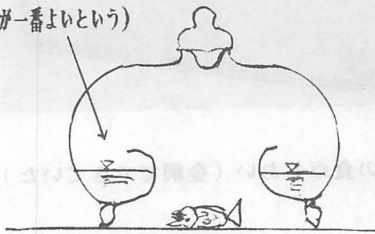
蠅取瓶

(ワタリ大) 昆虫図説

蠅の好きなものを瓶の下に置いておいて、上へあがる習性を利用し捕獲するもの。下の部分には水が溜まるようになっていて水没させる。水は米の磨ぎ汁が一番良いと聞く。イギリスの生活道具にも見だせるので、日本人の発明ではなく、外国からきたものと思われる。

水没させるため水を入れる

(米のとぎ汁が一番よいという)

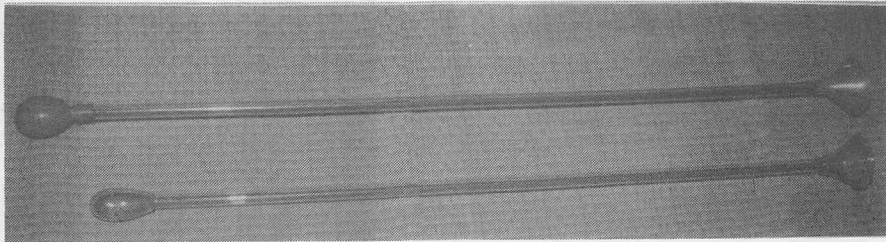


ハエの好くものを置く



天井蠅取棒

天井に止まっている蠅にかぶせ捕獲するもの。下に落ちてきたら水没させるように、下の脹らみには水を入れておく。今ならエアドールで一発に捕獲できる。ガラス製とプラスチック製がある。戦後によく使われたとおもわれる。



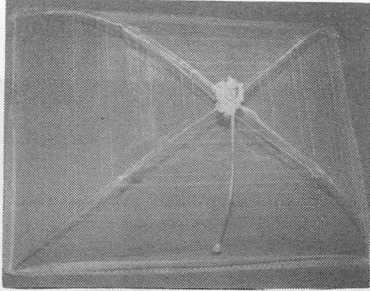
(ワタリ大) 昆虫図説

(ワタリ大) 昆虫図説

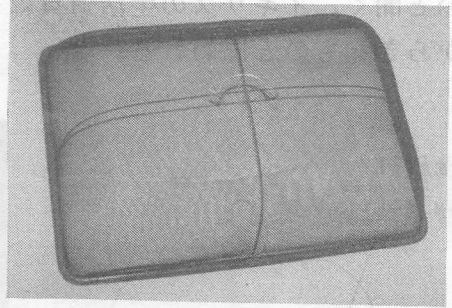
>>>この図は品食のなる蓋を反空にせし、わらわを脱出せしめるにあつて蓋を閉金
てんが>がゆき長らいうおれが正量。よへもが品需悉おこ外却つがの刺殺ありが
。よち

蠅巾長（食卓おおい）

これは現在も使用されている。蚊帳生地で作られている。調理品など食卓で使われる。昔はこれも金網で作られていた。



最近の食卓おおい（蚊帳生地で作られる）



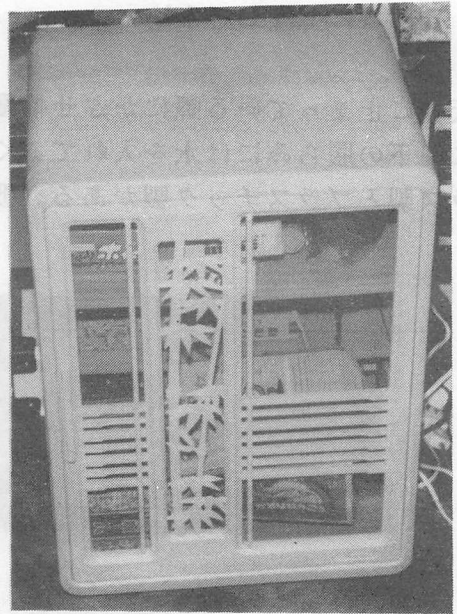
昔の食卓おおい（金網でできていた）

蠅取線香

昨年から発売された蠅専用の線香である。蠅といっても蚊も落ちるそうだ。昔の線香と同じ黄土色をしている。



蠅取線香



蠅帳（はえいらす）

蠅巾長（はえいらす）

金網が張ってあるため蠅から防げ、おまけに空気が通るため食品が腐りにくくなり冷蔵庫のない時代には必需品であった。最近ではほとんど見られなくなってきた。

ゴキブリのフォークロア

ゴキブリは播磨地方でも「油虫」として知られ、一番目にふれやすい昆虫のなかまです。起源は古く化石にも出てくる昆虫で、しぶとく嫌われ者です。脂ぎった体、粗雑な肢、不潔どれをとっても好感のもてない衛生害虫といえます。ゴキブリの語源は「五器（御器）嚙」（ごきかぶり）で、明治時代にゴキカブリを誤記しゴキブリとなったというのは有名な話です。昔から生息していた害虫のわりにはあまりゴキブリ駆除の民俗資料はみつからない。

電気ゴキブリ取り

ゴキトールという名で売られていたもので、なかに電池が入っており、なかにはいったゴキブリは電気ショックを受けるようになっている。

万能虫捕り器

ゴキブリ捕獲器として昭和40年代に発売されたもの。捕獲器のなかの餌にさそわれ軽いアルミの戸を開けてはいつてくると2度とでられない仕組みになっている。残念ながらこの捕獲器は、捕らえることはできますが捕らえたゴキブリを処分することがネックとなり、一般に不評をかい普及率が悪かったようだ。



万能虫捕り器



食毒剤のいろいろ

食毒剤

お馴染みのゴキブリダンゴでゴキブリの好む玉ネギのみじん切りや小麦粉などをホウ酸と練って家庭でもつくる。また市販されている。またゴキブリの餌という商品もあった。

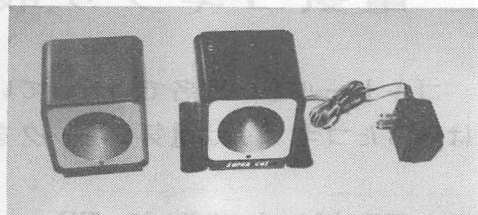
ゴキブリ捕獲器

いまでは、有るのが常識となってしまうているゴキブリ捕獲器の地元のアース製薬㈱のゴキブリホイホイは、初めて世に出て今年(1995)で22年という。初代のゴキブリホイホイは誘引剤を入れる方式で、捕獲器の床面にチューブ入りの粘着剤を塗るタイプである。4年後のちの2代目の商品では捕獲器の床は粘着シートのシールとなった。その後は改良をかさね、いまではゴキブリのあしから水分や油分を吸い取る「あしふきマット」付きになっている。

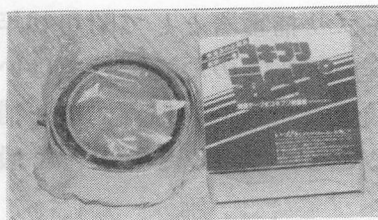
その他各メーカーも同様のような製品を出している。



ゴキブリ捕獲器



超音波ゴキブリよけ



ゴキブリテープ

超音波ゴキブリよけ

ネズミよけと同じものでゴキブリの嫌いな超音波を流しゴキブリを遮断するもの。商品名は「スーパーキャット」などが知られ、約60坪の広さの中から完全撃退というキャッチフレーズで市販されている。人間やペットには全く聞こえず無害という。周波数25,000~50,000Hz。電源はAC100V。

ゴキブリテープ

いわゆるガムテープの応用のようなもので、ゴキブリが歩きまわるようなところへ重点的に仕掛けておいて捕獲するもの。あまり捕獲できなかったのか商品としてあまりでなかったようである。

燻煙剤

殺虫剤の有効成分を煙霧化したりして、部屋のなかに生息するゴキブリを退治するものである。最初は火をつけて使用していたが、最近では水を加えることにより殺虫効果を得ているようです。



燻煙剤のいろいろ



害虫殺しのフオークロアのおわりに

害虫といえば生活上の害虫ばかりではない。農業害虫や森林害虫も決して忘れられない存在である。しかし、この方面の研究は、役所関係の専門家の分野であり、われわれ素人が口をはさむ必要はない。最後にあたり、播磨地方は本州でマツクイムシの発生した元祖であることを忘れずこれからも害虫の民俗と付き合っていきたい。ノミ、シラミなどの積みのこしの文もあるがまたの機会に譲りたい。